



も ばら し ご じゅう に わり い せき
茂原市五十二割遺跡

— 住宅市街地基盤整備事業（赤目川河川改修）埋蔵文化財発掘調査報告書 —







序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡が埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの業務内容に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業に係る発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行についても直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第8集となる、住宅市街地基盤整備事業の一環として行われる赤目川河川改修に伴って実施した茂原市五十二割遺跡の発掘調査報告書です。この遺跡は、九十九里浜平野を海岸線に沿って延びる砂堤上の遺跡です。

調査成果としては、中世のものとみられる土坑や溝状の遺構が検出されました。調査事例の少ない九十九里浜平野の歴史的様相を知り、この地の人々の営みを解明していくうえで貴重な成果を加えることができました。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する理解を深めるための資料として、多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には、多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成27年12月

千葉県教育委員会
文化財課長 永沼律朗





凡　　例

1 本書は、千葉県県土整備部長生土木事務所による住宅市街地基盤整備事業（赤目川河川改修）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

五十二削遺跡 茂原市萱場字五十二削4338ほか（遺跡コード210-016）

3 発掘調査は、千葉県県土整備部の依頼を受けて平成25年度に実施し、報告書作成に至る整理作業は平成27年度に千葉県教育庁教育振興部文化財課が行った。

4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

平成25年度（発掘調査）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 湯浅京子

発掘調査班長 蜂屋孝之

担当者 主任上席文化財主事 土屋潤一郎

実施期間 平成26年1月6日～1月21日

平成27年度（整理作業）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼律朗

発掘調査班長 蜂屋孝之

担当者 上席文化財主事 土屋潤一郎

実施期間 平成27年5月1日～5月29日

5 本書の執筆・編集は土屋潤一郎が行った。

6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県県土整備部河川整備課、同長生土木事務所、茂原市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。

7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「茂原」平成22年

第2図 茂原市発行 1/2,500 茂原市都市計画平面図

9 図版1に所収した遺跡周辺の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和47年2月22日撮影の72-C33-27（約1/10,000）を使用した。



本文目次

第1章 調査の概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	1
第3節 遺跡の位置と環境.....	2
1 遺跡の位置と地形.....	2
2 周辺の遺跡.....	4
3 基本層序.....	6
第2章 調査の成果.....	7
第1節 検出された遺構と遺物.....	7
1 土坑.....	7
2 溝状遺構.....	7
3 遺構外の出土遺物.....	9
第3章 総括.....	10
報告書抄録.....	卷末

表目次

第1表 周辺遺跡一覧.....	2
-----------------	---

挿図目次

第1図 五十二割遺跡の位置と周辺遺跡.....	3
第2図 遺跡の位置と周辺地形.....	5
第3図 基本層序.....	6
第4図 トレンチ配置及び本調査範囲.....	7
第5図 土坑(004・006)及び溝状遺構(001)....	8
第6図 遺構配置図及び出土遺物.....	9

図版目次

図版1 航空写真	図版3 004号跡・006号跡・006号跡土層断面
図版2 調査区近景・第7トレンチ確認状況・中央調査区完掘状況	図版4 001号跡・001号跡土層断面・002号跡





第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

茂原市の中心部から北にやや離れて南白亜川(なばきがわ)水系の赤目川が、太平洋に向かって流れている。赤目川は、上総丘陵を源とする二級河川である。通常の流量は少ないものの、かつては上流部のJR本納駅周辺での冠水によってJR外房線が不通となり、利用者に多大な影響を及ぼす災害も発生させていた。そのため、住宅街地盤整備事業の一環として赤目川河川改修工事が計画された。

平成18年8月、千葉県長生土木事務所は、区域内における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会に提出した。現地踏査の結果、土器等の散布により遺跡が所在することが確認されたため、平成19年2月「遺跡有り」の回答が出された。千葉県教育委員会は、千葉県長生土木事務所と埋蔵文化財の取扱いについて協議し、事業の性格上やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなった。

発掘調査は、調査対象2,170m²に対して210m²の上層確認調査を平成26年1月6日に着手し、同年1月10日まで行った。その後、確認調査の結果を受けて、遺構が確認された区域180m²の本調査を平成26年1月21日まで実施した。整理作業は、平成27年5月1日から同年5月29日まで行った。

第2節 調査の方法と経過

五十二削遺跡は、九十九里浜平野の砂堤上に立地し、立川ローム層の堆積がないことが明らかであった。そのため旧石器時代の調査は不要と判断され、縄文時代以降を対象とした確認調査を実施した。調査区全体に幅2m×長さ5m～8mのトレンチを主に配置し、適宜幅1m×長さ5m～6mのトレンチを設定した。耕作土を重機で除去した後、遺物・遺構の検出に努めた。調査区域には、赤目川の堤防が含まれていたため、後背地の調査の状況をみながら、本調査の必要性の有無を判断することとした。結果として、堤防のトレンチ調査を行うことが河川の安全上危険であることから、堤防本体の掘削は実施せずに終了した。確認調査の結果、第5トレンチおよび第9トレンチにおいて遺構が検出されたため、その周囲を含む180m²の本調査を実施した。検出された遺構の番号は、遺構の性格にかかわらず三桁の001から始まる数字で表記することとした。記録作成は、平板測量によりトレンチ・遺構平面図、遺構断面図等を作成した。写真撮影はデジタルカメラ(Raw・JPEGデータ)を使用するとともに、6×7モノクロ、35mmカラーリバーサルフィルムカメラにより行った。調査グリッドの設定は、第4図に示したように40m×40m大方眼グリッドを設定し、さらにこの大グリッドを4m×4mの小グリッドに100分割し、北西角を基点として西から東へ00、01、02……09、北から南へ00、10、20……90と番号を付して位置を示し、たとえば、4m×4mの小グリッドの表記は、1A-00と表記している。

整理作業は、調査図面・写真的記録整理、現場測量図面の修正、鉛筆トレースを行った。また、写真図版候補写真を選出し、写真図版を作成した。それらの作業と並行して原稿執筆を行い、その後、編集・校正作業を経て、報告書刊行に至った。また、報告書編集作業とともに報告書に基づいた遺物及び調査資料の収納整理作業を実施した。



第3節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形（第1・2図、図版1）

茂原市は千葉県の中央部に位置し、西側は上総丘陵、東側は九十九里浜平野の一部からなっている。市街地の大半は、九十九里浜平野の南端部にあたる11m前後の標高を呈している。九十九里浜平野は海岸線の延長約60km、奥行き約10kmの、日本最大規模の面積を有する砂堤列平野である。この九十九里平野については、縄文海進(有楽町海進)のピークにあたる約6,000年前以降の形成過程の復元が試みられている(森脇1979)。九十九里浜平野は、砂堤、砂丘、堤間湿地、谷底平野、旧潟湖、自然堤防などからなり、北西部の低い丘陵に源を発する河川は平野を形成するのに十分な堆積物の供給源にはなってはいないという。平野の大半を占める砂堤群は海退とともに発達し、大きく第I砂堤群、第II砂堤群、第III砂堤群に分けられ、形成時期は5,500～4,000年前、4,000～2,000年前、古墳時代以降順に陸化したと考えられている。現在のそれぞれの砂堤の標高は、およそ第I砂堤群が10m～7m、第II砂堤群が6m～5m、第III砂堤群が3m以下となっている。

茂原市の市街地は、最も初期に陸化した第I砂堤上にあり、今回発掘調査を実施した五十二割遺跡も南北白兎川水系の赤目川上流域左岸の第I砂堤上に位置している。調査対象地の標高は8m～9mである。調査前は主に畑として利用されていた。周辺の土地利用は、畑や水田、林などからなり、かつての砂堤の規模や形状をうかがい知ることは難しい。調査区域の南東端は水田となっていることから、砂堤の海岸に面する低地との境界が確認されたことになろう。概ね東西南方向に流れる赤目川は、九十九里浜平野に発達した砂堤の間を蛇行しながら水流を集め南白兎川に合流して太平洋に注いでいる。海岸からの奥行きは10kmにも及ぶものの、比高は10m程度であることから、水流はいたって穏やかである。赤目川には堤防が築かれ、川面は調査地点の畑の表層とほぼ同じ標高となっており、周辺の標高も水田にわずかな比高がある程

第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	時代	種類	立地	備考	No	遺跡名	時代	種類	立地	備考
1	五十二割遺跡	古墳、奈良・平安	包蔵地	砂堤上		23	南道免遺跡	奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
2	宿道跡	奈良・平安	包蔵地	低地		24	東山遺跡	奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
3	宿後遺跡	奈良・平安	包蔵地	微高地		25	上三町田遺跡	古墳(後)、奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
4	水田城跡	中世、近世	城跡	丘陵上	櫛輪・鋸切	26	野田遺跡	奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
5	鶴込後遺跡	奈良・平安	包蔵地	台地斜面		27	守下道路	奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
6	折戸遺跡	縄文(中)、平安	包蔵地	低地		28	御原駒塚	近世	塚	砂堤上	I基
7	吉井山遺跡	平安、中世	包蔵地	微高地		29	上人塚	中世	塚	砂堤上	I基
8	宮ノ下遺跡	縄文(中)	包蔵地	低地		30	野瀬道路	奈良・平安、中・近世	包蔵地	砂堤上	溝
9	本納城跡	中世	城跡	台地上	系、空塹、井戸	31	日立北塙遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	
10	龍教寺裏横穴	古墳(後)	横穴	台地斜面	1基	32	種荷前遺跡	縄文(後)、奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
11	神楽坂横穴群	古墳	横穴	台地斜面	3基	33	宮ノ下遺跡	縄文(中)、奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
12	落ノ下横穴群	古墳	横穴	台地斜面	4基	34	高野道遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	
13	浜谷横穴	古墳	横穴	台地斜面	1基	35	北塙東遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	
14	浜谷貝塚	縄文(前中後晚)	貝塚	低地	貝塚	36	東野中遺跡	奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
15	上井削横穴	古墳	横穴	台地斜面	1基	37	川岡遺跡	駄生(縄文)、古墳(後)	包蔵地	砂堤上	
16	北塙西遺跡	奈良・平安	包蔵地	低地		38	並塙遺跡	古墳(前)、平安	包蔵地	砂堤上	
17	旧光昌寺跡	近世	寺跡	低地		39	弓張遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	
18	上人塚遺跡	近世	塚	砂堤上	1基	40	官ノ腰遺跡	平安	包蔵地	砂堤上	
19	お塙山遺跡	近世	方墳、寺跡	砂堤上		41	馬場遺跡	弥生(後)、古墳(後)	包蔵地	砂堤上	
20	南飯塚貝塚	縄文	貝塚	砂堤上		42	八幡野遺跡	古墳、奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
21	絆田遺跡	平安	包蔵地	砂堤上		43	北ノ村遺跡	奈良・平安	包蔵地	砂堤上	
22	耕塚	中世(室町)	塚	砂堤上		44	宮豊遺跡	夷文(後)、奈良・平安	包蔵地	砂堤上	



第1図
五十二割道路の位置と周辺道路



度で、起伏の少ないほど平らな地形を呈している。検出された溝状遺構の覆土中に富士宝水火山灰(1707年)が確認されており、火山灰を被覆している耕作土の色調などが、耕作土下の土層と異質であることから、後世に客土が行われている可能性がある。

2 周辺の遺跡

前述したように、本遺跡が所在する砂堤は、縄文海退に伴って発達した最も初期に陸化した第Ⅰ砂堤であることから、縄文時代前期浜式期以降の人々の痕跡をとどめている可能性があると考えられる。1975年千葉県発行による土地分類基本調査図の表層地質図(千葉県1975)や、森脇による砂堤の復元図(森脇1979)によれば、茂原市街地周辺に広い第Ⅰ砂堤が発達していることが確認できる。今回の調査地点は、その第Ⅰ砂堤の北東側に位置している。当該地域における五十二割遺跡近隣の遺跡の規模はいずれも小規模で、河川と海水の流入による砂堤の複雑な発達状況を反映している可能性が高い。

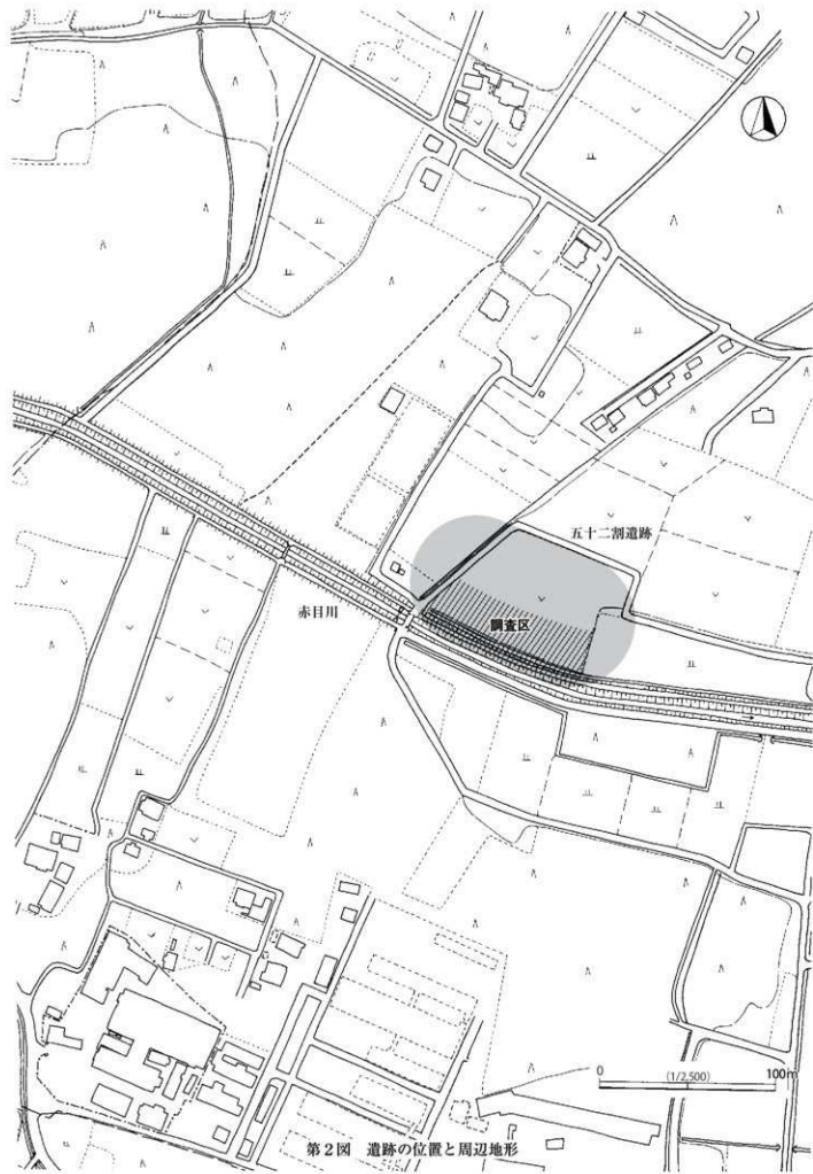
五十二割遺跡と同一の第Ⅰ砂堤上に存在する遺跡の調査が過去に行われており平成2(1990)年に新小菅遺跡の調査が実施されている。縄文時代前期浮島式の土器が出土しているほか、15世紀から16世紀の建物の柱跡とみられるビット群とそれを区画する溝が検出されている。平成3(1991)年の野際遺跡(30)の調査では、8世紀中葉から9世紀代の土師器とその時期とみられるビット群のほか、14世紀後半から16世紀初頭のかわらけ、常滑製品、古瀬戸などの国産陶器類などの遺物とともに土坑群と区画溝が検出されている。また、平成12(2000)年には茂原市街地を流れる阿久川の調整池工事に伴う川代遺跡の調査が実施されている。縄文時代前期津波式、中期五領ケ台式・戸戸尻Ⅰ式の土器が出土したほか、称名寺式期の堅穴住居跡が検出されている。また、古墳時代前期の祭祀跡と考えられる土師器の集中出土が確認され、奈良・平安時代の区画溝が検出されている。

砂堤上に存在する遺跡を見渡すと、弥生時代の遺跡としては、本遺跡から南東へ2kmのところに馬洗遺跡(41)がある。また、北東2.5kmに大網白里市川間遺跡(37)があり、いずれも弥生時代後期の遺跡である。

古墳時代については、前述の川間遺跡から前期及び中期の土器が、馬洗遺跡から後期の土器が出土し、赤目川対岸の上三町田遺跡(25)からも後期の土器が出土している。

奈良・平安時代の遺跡は、五十二割遺跡を埋むように南道免遺跡(23)、重吉遺跡(24)、上三町田遺跡(25)、宮ノ腰遺跡(40)、野田遺跡(26)、寺下遺跡(27)などがある。中世に関しては、北方2kmの大網白里市永田に經塚(21)があり、南西1.2kmに上人塚(29)が存在する。各時代の集落遺跡は、いずれも規模は小さいとみられる。

これまでみてきたように、調査事例などから縄文海進の海退後、前期後半には第Ⅰ砂堤上に生活の痕跡を残すようになることがわかるが、それ以降の砂堤の発達は海水準の変動に大きく影響され、決して安定的なものではなかったものと考えられる。辻 誠一郎による武藏野台地一帯の完新世の古環境の復元によれば、縄文時代中期から後期初頭にかけては浅い浸食谷が共通して形成され、縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭にかけても浸食谷が形成されており、これらは海水準の変動による海退が原因としている(辻1989)。海水準の変動は、標高の低い九十九里浜平野には極めて大きな影響を及ぼしたと考えられ、海水の浸入と海退による汽水化、淡水化の変移は、弥生時代以降の稲作などの生業に不可欠な安定した環境を長く保証するものではなかったと考えられる。「茂原」は「藻の原」に由来するといわれる。上総丘陵の台地と第Ⅰ砂堤との間には、ラグーンとも呼べるような潟湖が存在し、縄文時代前期後半では海水の流入が依然として続いている。その後淡水化が進んでも、砂堤に複雑に入り込む深い谷には水辺の植物が繁茂



第2図 遺跡の位置と周辺地形



する景観が至る所にみられたのである。

3 基本層序

確認調査及び本調査によって観察された基本層序は、およそ4層に分層された。地山となるのはやや粗めの青灰色の砂層で、砂堤を形成する砂層と考えられる。確認調査による各トレーナーで確認された地山の標高はほぼ平坦で、水年の耕作等により平準化されて、縄文海進後の砂堤の発達により陸化した旧地形をうかがい知ることはできない。

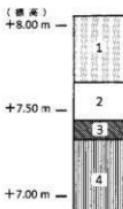
1層 耕作土 黒土を含む砂を主体とする層。客土されたものとみられる。

若干の遺物を包含する。

2層 暗褐色砂質土 砂を主体とし、若干の遺物を包含する。

3層 黒褐色砂質土 地山直上にみられる遺物を包含する層。粘質で黒色を呈する。縄文海進の海退直後からの堆積と考えられ、九十九里浜平野に面する低位段丘面に位置する遺跡や砂堤上の遺跡においても一般的に認められる層である。10cm~20cm程度の層厚を呈する。

4層 青灰色砂層 砂堤の地山となる砂層。中粒砂を主体とする。



第3図 基本層序

参考文献

千葉県 1975年『房総半島総合開発地域土地分類基本調査—茂原』

千葉県 1978年『土地分類基本調査—東金・木戸一』

森脇 広 1979年「九十九里浜平野の地形発達史」「第四紀研究」第18巻第1号

辻 誠一郎 1989年「開析谷の遺跡とそれをとりまく古環境復元：関東平野中央部の川口市赤山陣屋跡における

完新世の古環境」「第四紀研究」第27巻第4号

財團法人長生都市文化財センター 1992年『新小幡遺跡』

財團法人長生都市文化財センター 1993年『野際遺跡』

千葉県教育委員会 1999年『千葉県埋蔵分布地図(3)』

財團法人千葉県文化財センター 2002年『茂原市川代遺跡』



第2章 調査の成果

第1節 検出された遺構と遺物

調査の結果、土坑2基と溝状遺構2条が検出された。いずれも砂堤の地山砂層を掘り込んでおり、時期は中世と考えられる。堅穴住居跡などは検出されなかった。これらの遺構のほか、溝状遺構が数条検出されている。遺構番号は付したもの、検討の結果、近世以降の所産と判断されたため省略した。

出土遺物は、弥生土器、古墳時代土師器、奈良・平安時代土師器、中・近世陶磁器などである。いずれも小破片で、耕作土のはか各層位から散発的な出土であった。時期の特定が難しい無文の土器片が主体で、図示できるのは遺構覆土から出土した土器片2点のみである。

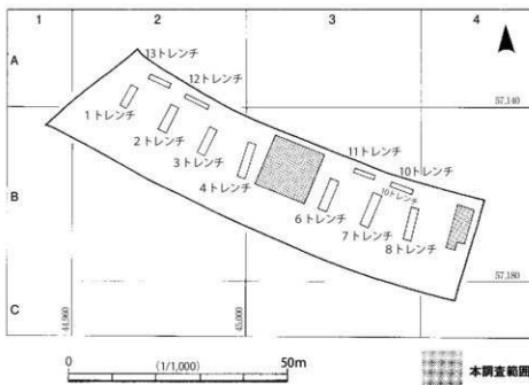
1 土坑（第5・6図、図版3）

004号跡 長軸1.7m、短軸推定0.8m、深さ0.4mの不整椭円形を呈する。長軸方位はN-15°-Eを示す。中央部に搅乱された部分があり、本来の形態が若干失われている。第6図1は覆土中層から出土した弥生時代後期の壺の破片で、羽状繩文が施されている。胎土は、茶褐色で均質な焼成である。本遺構の時期は、覆土の色調などから中世ないしはそれ以前の時期であると考えられる。

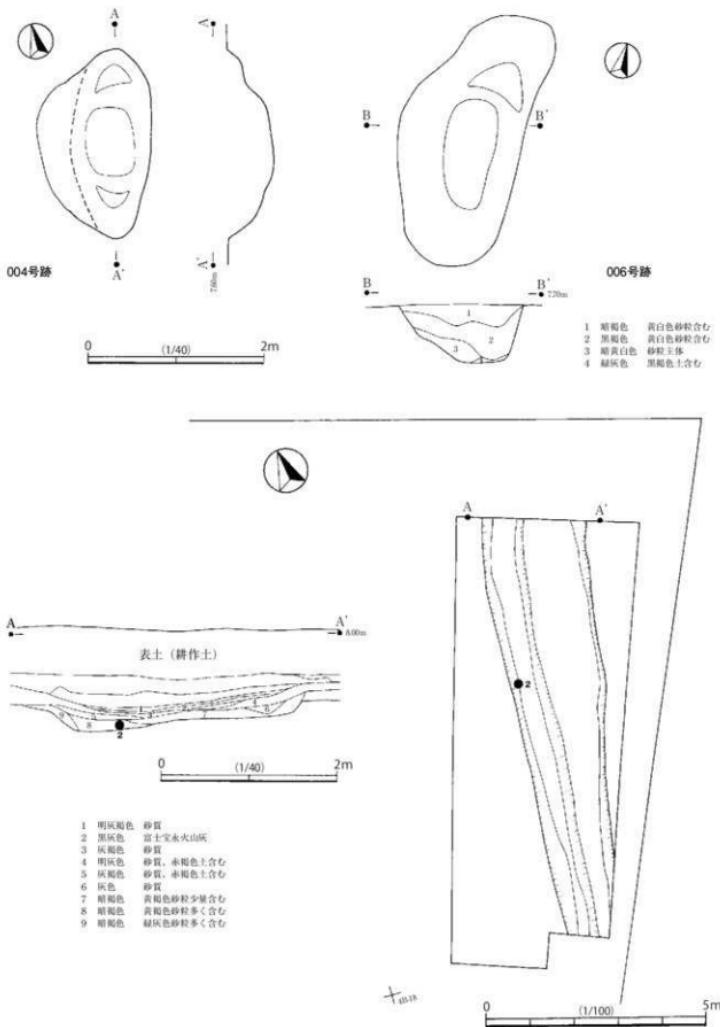
006号跡 長軸2.4m、短軸1.1m、深さ0.6mの不整椭円形を呈する。長軸方位はN-5°-Eを示す。小破片のため図示できないが、覆土から古墳時代後期の土師器長胴壺の胴部片と考えられる土器が出土している。本遺構の時期は、覆土の色調などから中世ないしはそれ以前の時期であると考えられる。

2 溝状遺構（第5・6図、図版4）

001号跡 覆土上層に富士宝永火山灰（1707年）が含まれており、本跡がほぼ埋まりかけた頃に降雨があったものと考えられる。溝幅は2.3mで、断面形状は深い逆台形を呈す。片側に深さ0.1m～0.2mの浅い溝が伴っている。地山の砂層を掘り込んでおり、底面にはわずかだが硬化した面があり、南北方向に延びる道



第4図 トレンチ配置及び本調査範囲



第5図 土坑（004・006）及び溝状遺構（001）

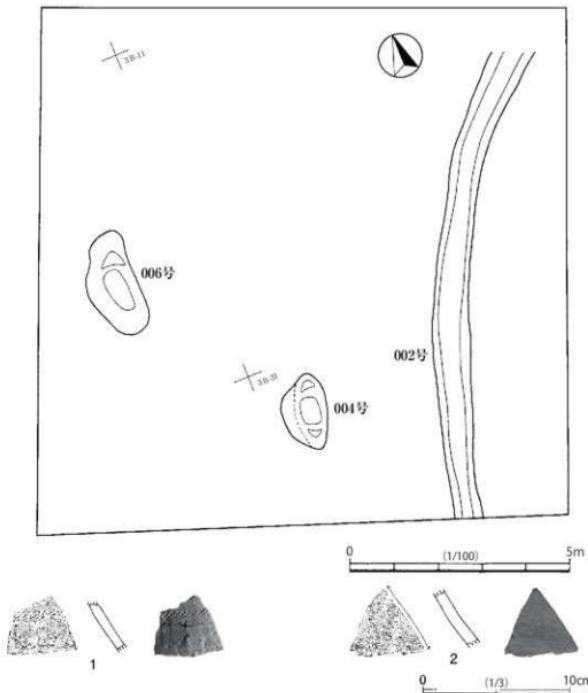


路として使用された時期があった可能性がある。遺物としては、第6図2の溝底面から出土した須恵質の灰白色の土器片のみである。渥美産の大甕の破片とみられる。断面の一部が磨滅しており、研磨具として再利用されたものと考えられ、千葉県内の中世遺跡からの出土例に類例がある。本遺構の時期は、覆土の観察及び出土遺物から中世と判断したい。

002号跡 幅0.8mで断面形はU字状を示す。近世以降に掘られた数条の溝などに搅乱されている部分がある。南北方向に延びるがやや東側に湾曲している。覆土から奈良・平安時代の土師器甕の極小破片が数点出土した。覆土の観察及び出土遺物から中世あるいはそれ以前の時期と判断したい。

3 遺構外の出土遺物

その他に調査区全体からは、古墳時代の土師器片や奈良・平安時代の土師器片、近世陶磁器片などが少量出土している。いずれも図示できる出土遺物はない。いずれも極端な摩滅状態ではないものの5cm程度を下回る小片が多かった。出土層位も基本土層で示した3層からの出土に限られてはおらず、表層の耕作土中からも採集されている。いずれも集中地点がなく散漫な出土であった。



第6図 遺構配置図及び出土遺物



第3章 総 括

今回の調査は、九十九里浜平野の砂堤上に位置する遺跡の調査である。調査例がそれほど多くなく、周辺の砂堤上の遺跡群の実態については不明な点が多い。今回の調査地点では、砂堤の南面端が確認されたにとどまる。砂堤の地山となる青灰色砂層の確認面における標高は7.6m前後で、隣接する水田耕作土表面との比高は数10cmである。地山砂層を掘り込んだ遺構は、土坑2基、溝状遺構2条である。いずれも出土した遺物が伴うと判断するのは難しく、覆土の状況や土層の観察から中世ないしはそれ以前の構築であろうと判断される。縄文土器は1点も確認されておらず、弥生土器片がわずかに1点、古墳時代以降の土器片が少數出土しており、出土土器の多くは遺構の構築時期を直接反映してはいないと思われる。

森脇による九十九里浜平野の発達史を参考にすれば、茂原市周辺では、約6,000年前にピークに達した縄文海進以後、古期砂丘の形成が始まり、海岸が急速に後退して第Ⅰ砂堤群が形成されていく。砂堤は陸化し、離水した直後から植生で覆われ、上総丘陵の台地との間の潟湖は、依然として海水の流入する環境にあったらしい。約4,000年前以降の縄文時代中期以降になると小海退によって第Ⅱ砂堤群が形成されていく。台地に入り込む谷底は汽水的な環境であったが、次第に淡水化していったと考えられる。縄文時代晚期以降、特に弥生時代に入ると急速に海退が進み、最大低下期には現在の海水準よりも相対的に低下した可能性があり、第Ⅱ・第Ⅲ砂堤群の形成が進む。古墳時代以降さらに第Ⅲ砂堤群が発達し、現在のような九十九里浜平野に至っている（森脇1979）。調査区域内に設定した確認調査のトレーンにおける地山となる砂層はほぼ水平で、永年の耕作などによる影響を受け、第Ⅰ砂堤群形成期の地形をほとんど残していないと考えられる。今回の調査では縄文土器の出土はなかったが、大網白里市の上貝塚貝塚（小高ほか1985）のように縄文時代後期には第Ⅰ砂堤群上に人々が生活していたことが確認できることから、周辺の調査事例なども含めれば、縄文時代前期後半には、第Ⅰ砂堤群の発達を足がかりに次第に生活的領域が砂堤上に及んでいくのであろうと考えられる。弥生時代になると、周辺には茂原市馬洗遺跡や大網白里市川間遺跡などの弥生時代遺跡があり、弥生時代の小海退期の海岸線の後退に伴い、淡水化の進行と相まってさらに低位面に人々が進出したものと考えられる。古墳時代については、今回の調査では遺構が確認されなかつたが、古墳時代の土師器とみられる土器が出土しており、その痕跡をわずかに捉えることができたが、詳細な時期が特定できるには至っていない。また、中世またはそれ以前と判断した溝状遺構については、その性格を決定するには至らないが、茂原市新小幡遺跡や川代遺跡の調査によって多数検出された区画溝などのように、標高が低く水はけが悪い砂堤上の排水を促すための施設であった可能性が考えられる。

参考文献

- 茂原市史編纂委員会 1966年『茂原市史』
森脇 広 1979年「九十九里浜平野の地形発達史」「第四紀研究」第18巻第1号
小高春雄ほか 1985年『大網白里町上貝塚発掘調査報告書』大網白里町史編さん委員会
財團法人長生都市文化財センター 1992年『新小幡遺跡』
財團法人長生都市文化財センター 1993年『野際遺跡』
財團法人千葉県文化財センター 2002年『茂原市川代遺跡』

写 真 図 版



図版1

航空写真 (1/10,000)

図版 2



調査区近景（西から）



第7トレンチ確認状況
(南から)



中央調査区完掘状況
(西から)



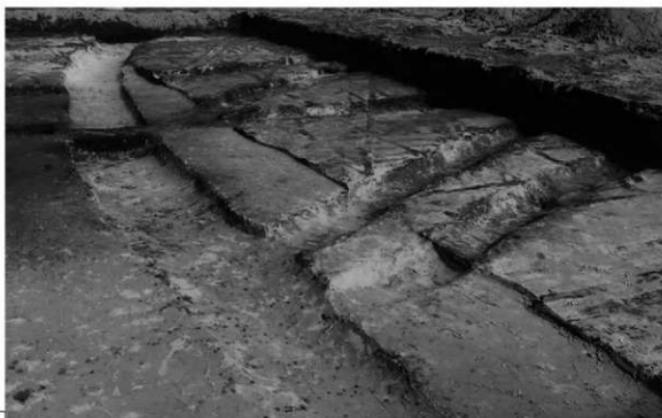
004号跡



006号跡



006号跡土層断面



報告書抄録





千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第8集

茂原市五十二割遺跡

—住宅市街地基盤整備事業（赤目川河川改修）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成27年12月25日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

株式会社 正文社

千葉市中央区都町1-10-6

